

日本メルロ＝ポンティ・サークル 第22回研究大会プログラム

日時：2016年9月11日（日）

会場：日本大学通信教育部市ヶ谷キャンパス

1号館5階51講堂、52講堂（控室：ミーティングルームI AB）

【個人研究発表】（9:00-13:00）

9:00-9:45 今江秀史（大阪大学）

「現象学と人間の科学の関係における癒合的社会性」

9:45-10:30 佐野泰之（京都大学）

「言葉における肉 ラガーシュを読むサルトルとメルロ＝ポンティ」

10:45-11:30 竹谷美佐子（大阪大学）

「舞踊の稽古における間身体性の考察 身体の同調・同期をつうじた技法の獲得」

11:30-12:15 酒井麻依子（立命館大学）

「ソルボンヌ講義における対人関係の病理 『アバンドニック』を中心に」

12:15-13:00 澤田哲生（富山大学）

「メルロ＝ポンティとワロン 超-事物をめぐる」

【昼食休憩 + ビジネスミーティング】（13:00-14:00）

【シンポジウム】（14:00-18:00）

「メルロ＝ポンティと欲動の問題」（オーガナイザ：河野哲也）

14:00-14:30 河野哲也（立教大学）「知覚の扉は開き、一切の欲は解消したか」

14:30-15:00 Michel Dalissier（Université de Kanazawa）“ Merleau-Ponty et le désir ”

15:00-15:30 福田肇（樹徳中高一貫校）「ナルシシズムとリビドー的身体」

15:30-16:00 檜垣立哉（大阪大学）「欲動イメージと身体性について」

16:10-18:00 全体討論

【シンポジウム要旨】

「メルロ＝ポンティと欲動の問題」

メルロ＝ポンティは、知覚について語り、運動志向性（「私はできる」）について語る。メルロ＝ポンティによれば、知覚を構成する原理は、「我能う」、別の名は運動志向性である。しかし、なぜ彼は、この知覚の構成原理を突き詰めることをしなかったのか。運動志向性が切り開くものは、世界の可能性であり、未来の自己であるはずだが、この世界に対して、メルロ＝ポンティ的主体は何かをしようとしな。自由は状況の中で与えられ、それに制約されていたとしても、それでも主体は自由である。メルロ＝ポンティ的主体はどのように選択し、どの方向に向かい、いかに自由を行使するかを語らない。

彼の記述する身体的主体からは、それが何を望み、何をなそうとするのか、その望むところのものが一向に見えてこない。フロイトなどによる心的ダイナミズムの理論を参照するも、メルロ＝ポンティの描く主体は、知覚し、運動し、意図する可能性を秘めているものの、まるで動く気配がない。それはメルロ＝ポンティの主体に欲動（あるいは、欲望、欲求、希求、とみかく「欲し、求める」こと）が与えられていないからである。あるいは、隠されているからである。しかし欲動が発動しない主体は、個人たり得るのだろうか。ポーヴォワールの主体は、あきらかに欲動をもち、あきらかに個人である。ポーヴォワールその人である。これに対して、メルロ＝ポンティの主体は、誰だか分からない。だから、他者との衝突が問題化しない。現象学的身体論は、凡庸なことに、このメルロ＝ポンティの傾向を引き継いでしまっているように思われる。欲動する身体現象学は、最近のフェミニズム現象学を待って（すなわち、ポーヴォワール的な展開のもとで）ようやく始まった感がある。

もし、メルロ＝ポンティの主体がこのようであるなら、それはなぜだろうか。彼はなぜ、身体論として、欲動する身体でも、感情に動機づけられた身体でもなく、知覚する身体についての研究を展開したのであろうか。そうではなく、メルロ＝ポンティの哲学は欲動論を展開する大きな可能性を秘めているのではないだろうか。いやそもそも、身体と欲動とはどのような関係にあるのだろうか。それ以前に、私たちは欲動を持ち得るのだろうか。メルロ＝ポンティにおける一見したところの欲動論の空白は、私たちの思惟を引き込むのである。本シンポジウムでは、メルロ＝ポンティ「における」（「における」と言えるかどうか分からないが）欲動をテーマとする。檜垣、ダリシエ、福田、河野がメルロ＝ポンティの身体論と絡めながら、欲動について論じる。

提題 1: 河野哲也（立教大学）「知覚の扉は開き、一切の欲は解消したか」

本発表では、なぜ、メルロ＝ポンティが、知覚する身体をテーマとして、その後、存在論に関心を持つようになったのか、そのディープな動機を推測しつつ、知覚という欲動の独自性について考察したい。すなわち、欲動一般のなかに位置付けたときに、知覚を含む認識への欲動がどのような種類のものであるかを考察し、それが個性性を破壊する死の欲動と結びついているのではないかという仮説を立ててみたい。オルダス・ハクスレーの言う「知覚の扉」を開き、「偏在精神」となることが認識の欲動であるが、これが欲動という志向性をもつ働きと両立するかについて、メルロ＝ポンティを超えて考察することにする。

提題 2: Michel Dalissier (Université de Kanazawa) “ Merleau-Ponty et le désir ”

Le désir se présente comme une sorte de point aveugle de la phénoménologie merleau-pontienne. Mais est-ce là la trace d'une carence ou d'un déplacement de la problématique en direction d'autres domaines de cette philosophie ?

Dans cette communication, nous tenterons de dégager trois régions d'investigation principales. Tout d'abord, quelle est cette «signification métaphysique» que Merleau-Ponty prête au désir, et en quels sens l'entendre au beau milieu d'une phénoménologie de la perception ? Quelle spécificité possède cette notion par rapport à la sexualité, à l'amour, à la pudeur, ou encore la volonté ? Ensuite, sous quelle forme le désir se déploie-t-il au cœur du dialogue incessant qu'entretient ce dernier avec la psychanalyse, dans sa version la plus «existentielle» ? Enfin, de quelle manière singulière le désir se retrouve-t-il pris dans le courant ontologique mouvementé de la dernière philosophie, dans les entrailles naturelles de l'esthésiologie, et le jeu de miroir du visible et de l'invisible ?

提題 3: 福田肇 (樹徳中高一貫校) 「ナルシシズムとリビドー的身体」

病態失認 (anosognosie) と幻肢 (membre fantôme) について、メルロ = ポンティは、それらの現象を、世界に拘束されている主体が自分の手足の機能停止や切断にもかかわらずいままごと同じく世界へと向かい続けていることを示唆するものであるとしている。つまり、主体は、身体の一部の機能停止や切断をすでに知りつつ、それらを否認しているということである。別の言い方をすれば、身体の一部の欠損や機能停止にもかかわらず、身体の習慣的層が世界との紐帯を失わないであり、当該箇所を、世界の中の諸対象からの呼びかけになお応じうるものとして主体に表象させているということである。

興味深いことに、メルロ = ポンティは、二つの箇所で、この事態を友人や親族の死を否認することにとたえている。たとえば、ブルーストは、祖母の死にもかかわらず、「彼女を自分の生活の地平に保っているかぎり、彼女をなお失っていない」のである。

ブルーストはまさに「喪に服している」(être en deuil) のであり、彼にとって「喪の作業」は未完了である。こう考えると、メルロー = ポンティが提示した「喩え」は、思いがけず病態失認や幻肢の異なる解釈への道をひらくことにはならないか？ ラカン派精神分析家向井雅明氏は、神経科学者ラマチャンドランの『脳のなかの幽霊』で紹介される「幻肢の奇妙な例」を引用する。すなわち、手術で腕を切断された男が、何かにかじられるような、奇妙な幻肢を体験する。彼が切断された腕のありかを調べると、それは病院の裏庭に埋められ、無数の蛆がたかっていたという。そこで、腕を焼却処分してもらったところ、その日から幻肢の感覚が消失した。ラマチャンドラン自身は、このエピソードを一種の「怪談」の類として一笑に付したが、向井氏はそこに「喪の作業」の完了をみる。つまり、身体はリビドー備給されており(リビドー的身体)、身体の一部の突然の欠損にもかかわらず、リビドー備給自体はすぐには撤退しないのであり、そこに幻肢という現象が生じるというのである。

メルロ = ポンティは、リビドーを「心身的な主体がもつ、様々な環境にくっつき、様々な経験によって固定され、振る舞いの構造を身につける一般的な力」言い換えれば、主体が身体を媒介として世界へと向かい続けることを可能ならしめるある種の「力」として再定義したのだが、少なくとも『知覚の現象学』の時点では、そのリビドーが当の身体そのものへ備給されていること、すなわち「リビドー的身体」というナルシシズム的な次元を欠落させていたようにみえる。

しかし——向井雅明氏も指摘するように——、メルロ＝ポンティは、『見えるものと見えないもの』において、見る者が自分の見ているものの中に取り込まれ、そこに自分自身を見るという「根本的なナルシズム」について言及している。この「ナルシズム」は、はたして「リビドー的身体」という次元とかかわるのか、見ていきたい。

提題 4: 檜垣立哉 (大阪大学)「欲動イマージュと身体性について」

本稿においては、おもにドゥルーズの『シネマ』第一巻において論じられる欲動イマージュを主題としながら、欲動と身体の関係を考えてみたい。ドゥルーズの『シネマ』は、よく知られているように、第一巻が運動イマージュという、一種の有機的に連関したイマージュとその作動をあつかい、第二巻において時間イマージュという、そうした作動が崩壊するあり方を提示し、時間の結晶という存在論的時間の位相にいたっていく構成がとられている。しかし有機的な運動連関のほつれは、もともとエイゼンシュテインなどのモンタージュそのものにもみられ(それは映像そのもののおもとにおいてみいだされるということである)、さらに運動イマージュの完成体である行動イマージュ自身がすでに運動イマージュの解体を含んでいる。そのあいまで欲動イマージュは独自の位置をしめている。それは(そのほかの運動イマージュもそうであるように)、単純な有機体的結びつきの中でとらえられる知覚のあり方を示してはいない。

こうした欲動に焦点をあてたイマージュ論は、精神分析的な議論とは別様の仕方でも欲動を知覚との連関で語ろうとした点できわめて特徴的であるともいえる。『シネマ』では冒頭において、自然的知覚を巡るメルロ＝ポンティ批判がなされてもいるが、この発表ではそうしたドゥルーズ特有の身体と欲動の分類学を検討し、あわせて、メルロ＝ポンティの身体性を巡る批判を介したつながりに論点を導いていければと考えている。